



Number 28

June, 2024



ジョージ・エリオット『ミドルマーチ』日本語訳出版を振り返って

岡山大学名誉教授 福永 信哲

文学作品は読者を映し出す鏡

長年の懸案であった『ミドルマーチ』日本語訳上・下巻を2024年3月に完了し、上梓した今、おのれの本分を尽くした安堵の思いがある一方、誤字、脱字、不正確な文言などが早くも見つかり、恥ずかしい思いを禁じ得ない。ジョージ・エリオット協会の企画の一部である以上、不十分な点が残ったことに対し、会員の皆様方にお詫び申し上げたい。

ジョージ・エリオット全集の出版という遠大な企画を立案され、監修の重責を担われた内田能嗣先生、海老根宏先生のご尽力に心より感謝申し上げたい。とりわけ、『ミドルマーチ』校閲の任に当たられた海老根先生には多大な時間をかけて拙訳原稿の問題点を指摘していただいた。誤訳の訂正、文体の不適切さ、原文への忠実さの欠如、注の説明の不十分さなど、丹念に吟味していただき、精細なご助言を賜った。これは、私には得がたい学びの機会となった。この機会を借りて、衷心よりお札を申し上げたい。

翻訳作業はいつ終わるとも知れない、辛抱の要る営みであったが、不思議にも仕事に倦んで、投げ出したくなることはついぞなかった。翻訳は究極の精読と言われるように、作家の言説との絶えざる対話だということを、改めて認識した。そのプロセスで、それまで気づかなかった問題点や隠れた意味あいを発見した喜びは小さいものではなかった。作品に鏡のイメージが頻出するが、翻訳とは読者が自分の姿を作品という超高感度の鏡に映し出されるプロセスではないかと、振り返って気づかれた。それほどに、すぐれた作品には、読者の器に応じてその姿を現す真価があることが実感された。その観点から見ると、拙訳は私の小さな器に映し出された大作家の歪んだ像のようなものかも知れない。

ジョージ・エリオットの円熟期の文体は「多音声」を宿していると言われる。語り手が時に登場人物の心境に溶け込み、当人の心の思いを語り、時に洞察力ある語り手が偏見や利害に囚われた当事者の自負を皮肉ってみせる。絶えず視点を移動して、人物が関係し合い、相互に影響し合い、時に傷つけ合い、時に愛し合い成長してゆき、あるいは因果応報の道理によって罰せられるさまを、語り手は俯瞰的に見せてくれる。こうして読者は、多様な人物の織りなす人生模様をつぶさに眺め、おのずと人生の多様な価値を相対化し、おのれの価値を作品地図の中に位置づけるよう仕向けられる。

「訳者あとがき」の中で、筆者はこう述べた。「現代社会で重視される効率主義と生産性の価値尺度は、文学の古典講読には馴染まない。ただひたすら心を無にして読むことによってのみ、作品の囁く声が聞こえてくるように感じられた」と。言い換えると、無心にテクストの文脈に聞き耳を立て、その囁き声に聞き入る他には参入できない世界がそこにある、と思われた。では、こう思わせるジョージ・エリオットのテクストにはどんな特徴があるだろうか？その実例を一つの場面を例に取って、具体的に取り上げてみたい（以下、「解説—その二」、『ミドルマーチ』下巻 525-26 頁参照）。

人と人との触れ合いこそプロットの推進力

『ミドルマーチ』には人ととの個性が触れ合って、言わば化学反応を起こす場面が少なくない。これにより、人物は新たな体験をして変わるだけではなく、物語自身が新しい展開をしてゆくのだ。命の相互依存は、個々の登場人物の間にあるだけではなく、人物同士のネットワークと、一つの全体としての作品の形式にも見られる。30章でドロシアが夫カソーボンの健康の衰えを心配し、掛かりつけ医のリドゲイトに相談する場面がある。夫との緊迫したいさかい（29章）の結果、彼は心臓発作を起こしたのである。その折の二人の触れ合いは、それぞれの人生の転機ともなった。「どうかお助けくださいませんか？」すすり泣くような声で夫の身を案じるドロシアは、リドゲイトにこう吐露した。

「ああ、あなたは知恵の深い人なのでしょ？生きること、死ぬことについて知り抜いておられるのでしょうか。お教えくださいまし、わたくしに何ができるか、お考えくださいまし。夫は生涯心血を注いで研究をしてきました。それが完成することを心待ちにしてきたのです、他のことは心になかったのです—そして、わたしもそのことのみ考えて—」

その後いく年もいく年も、リドゲイトはこの思わず口を衝いて出てきた訴えが彼の心に残した感銘を忘れるることはなかった。それは魂から魂へと訴える叫びであった。二つの似通った天性が、同じ因縁の糸で絡み合った環境の中、悩みが多いながら時折光に照らされる人生で相響き合うのみで、それ以外のいかなるはからいも混じらない叫びが心に焼き付けられたのである。（上巻 367 頁）

“Oh, you are a wise man, are you not? You know all about life and death. Advise me. Think what I can do. He has been laboring all his life and looking forward. He minds about nothing else—And I mind about nothing else—”

For years after Lydgate remembered the impression produced in him by this involuntary appeal—this cry from soul to soul, without other consciousness than their moving with kindred natures in the same embroiled medium, the same troubrous fitfully illuminated life. But what could he say now except that he should see Mr. Casaubon again to-morrow?

（Oxford World Classics. 2008, p. 272.）

試練のただ中で人格の奥底からほとばしり出る心の叫びというものがある。迷い苦しむおのれをさながらに投げ出し、自己の外にある大きな働きに身を任せる他にない瞬間がある。そういう淵で発せられた言葉には、当人が表現しようと意図する以上の人間性が溢れ出るものだ。夫の人間性のありようはどうであれ、悩み苦しむ伴侣に憐れみを禁じ得ないドロシアの姿は、紛れもない個性のほとばしりなのだ。人と人の個性が真に出会うのは、そういう稀な瞬間なのだ。この場面でリドゲイトは、自分を忘れて夫の苦衷をいたわる貴婦人の人間性を見た思いがしたのである。こういう人間性の発露は、これに触れた相手の心の機微に働きかけ、一つの体験として生き続けるのだ。「同じように悩みが多いながら時折光に照らされる人生で」（the same troubrous fitfully illuminated life）、相談する側も支える側もともに、闇を手探りする中で導きの光に照らし出される体験をしたことが、この言い回しに暗示されている。同時に、一人の人格の統合性とは、当人と同胞との関わりあいにあるという道理が示唆されている。だからこそ、人は他者との真正の関わり合いと、その導きなしには生きられないである。

上記引用の「同じように悩みが多いながら時折光に照らされる人生で」では、試練のただ中にあって悩み苦しむ我々の心にふと気づきが訪れたり、同じような体験をした人の漏らした一言が明かりのように心に射し込んだりすることがある。エリオットはこういう稀有の瞬間を凝縮した語句で、絵画のように描く詩的直観を持っている。訳しながら心打たれ、自分は作家に導かれている、と感じたことが忘れられない。

■研究発表

マギーとジェーンの選択：『フロス河畔の水車場』と『ジェーン・エア』における主人公の比較考察 東京都立大学助教 佐久間 千尋

本発表では、George Eliot の *The Mill on the Floss* と Charlotte Brontë の *Jane Eyre* の女性主人公の選択に着目して考察した。Maggie が洪水の中 Tom のもとに向かい、一緒に沈むことによって魔女ではないことを証明するという結末は、魔女と疑われた Maggie による逆転の魔女裁判を意味していると読むことができ、これは Bernard J. Paris が示唆した Maggie の無意識下の Tom への復讐願望を裏づけるものである。水車場の崩壊は、Maggie が雁字搦めにされていた共同体、いわゆる魔女裁判の法廷ともいえる場所の崩壊を示唆し、その再建は新たな共同体の再生を暗示する。Maggie は自己犠牲をもって自己を他者として疎外する魔女狩りとの闘いに終止符を打ったといえる。一方、*Jane Eyre*において Bertha が自己犠牲によって自らの牢獄である Thornfield を焼失させる結末にも、迫害者の Rochester に復讐を果たし、結果的に自らと Jane を解放した逆転の魔女裁判の構図を読みとれる。エリオットの他の作品についても今後研究を進めていきたい。

■シンポジウム

『フロス河畔の水車場』再考——テクストを身近に

本シンポジウムの発案の由来は、日本ジョージ・エリオット協会内における『フロス河畔の水車場』再考の機運の高まりにある。2022年に植松みどり氏による翻訳書が出版され、さらに、大竹麻衣子氏を中心に本作品の教科書化の作業が進行中である。また、振り返れば、協会発足後の第1回大会のシンポジウム対象作品が『フロス河畔の水車場』であった。それ以降に本書単体を対象とするシンポジウムは行われていないこともあり、ちょうど四半世紀を経た時期に改めてこの小説を俎上に載せることには意義があると考えた次第である。

登壇者の面々が共有したのは、『フロス河畔の水車場』というテクストをさらに身近で親しみ深いものとするためのアプローチという方向性である。各人が独自の視座からテクストを再考することにより、作品の新たな魅力の数々を提示した。さらに、すべての発表を終えた後に、全員で互いの内容の接点をコメントし合うという新たな試みも行った。各発表の概要は以下の通りである。 (池園 宏)

■報告1

教室で読む『フロス河畔の水車場』

桜美林大学教授 大竹 麻衣子

本発表では、まず、近年の大学での英語および英文学教育における文学テクストの位置付けをめぐる議論を整理し、その可能性と授業の目標や教授法の一般化の難しさについて論じた。次に、英語や社会、文化、英文学を教える素材としての *The Mill on the Floss* の魅力と難しさを検証し、それらを踏まえた筆者の授業実践の報告と振り返りを行った。筆者は、本作品の教材としての難しさを、英文の難易度、内容理解に必要となる背景知識の要求度の高さ、作品のテーマと現代の一般的な学生の関心事との隔たりの大きさにあると考えたが、翻訳やあらすじを利用しながら、作品が描く社会や複雑な倫理的問題について考察させることを主眼とする授業実践を行なった。学生の主体的な考察や分析を促す問い合わせなるワークシートを予習課題とし、授業内での学生同士のディスカッションを経てまとめの考察を提出させることを繰り返すことで、作品内のジェンダー観を現代的な問題に接続させた考察や、登場人物に深く共感しつつ客観的・論理的な分析を展開する解釈などが見られるようになった。『フロス河畔の水車場』は学生を主体的な読みに誘う素材として相応しいとの結論に至った。

■報告2

『フロス河畔の水車場』における子ども性

山口大学教授 池園 宏

『フロス河畔の水車場』の子ども表象については先行研究があるが、本発表ではそれらに加えて子ども研究関連諸分野の知見にも目配りしながら、テクストに内包されたマギーの子ども性を巡る問題を掘り下げるにより作品の再考を行った。

最初に試みたのは、近代における子ども観の変遷の歴史と本作品との関連性に関する考察である。ロマン主義思想とピューリタニズム思想に見られる対照的な子ども観、両者に共通する教育思想、さらにはその延長線上にある児童文学の趨勢など、多角的な視点から子どもを巡る歴史的現象とマギーの特性とのつながりを検証した。

上記の内容を土台にしつつ、発表の後半では、ビルドゥングスロマンでもある本作品で提示される思春期以降のマギーに焦点をシフトして、さらに議論を発展させた。成長するマギーの根底に存続し、成長後も留まり続ける子ども性が、人生の方向性を決定づける重要な諸局面——トマス・ア・ケンピスの書との遭遇、スティーヴン・ゲスト事件、最後の洪水シーン——において前景化し、持続的干渉を及ぼし、彼女の悲劇に結びついている事実を論証することにより、本作品に関する新たな解釈を提示した。

■報告3

翻訳の領域

和洋女子大学名誉教授 植松 みどり

The Mill on the Floss の翻訳にあたり「翻訳の領域」もしくは翻訳者の領域についての苦悩の経験を語った。創作者と読み手と翻訳者の立ち位置をどのように考えたらいいのか。翻訳するものはどこまで自由に作品に対処できるのか。

「翻訳者」とは優れた「読み手」「批評家」であるべきだと大江健三郎は述べ、さらに優れた「書き手」であれと、「新しきひとよ 目覚めよ」で提示している。

では、翻訳者はどの程度、原作からの変化、逸脱を許されるのか。特に地域も年代もかけ離れ、文化の異なる異国との翻訳のときに。『フロス河畔の水車場』翻訳にあたり、自由に、勇敢に、厚かましくも決断した個所を具体的に取り上げ登場人物の社会的な、特に家族的な位置についての考察と、この作品に現れた差別用語に対する、当時の作者の意識と現代の受け取り方の差異などについて考え決断した箇所を述べ、その是非を聞き手に問いかけた。

最終的には、作品の短所ともされているスティーヴンの存在と悲劇的な結末、「洪水」の意味を現代の視点から読みとり、*The Mill on the Floss* で G.エリオットが、過去、現在、未来をつなぐ小説家であるという、翻訳者からの評価を示した。

■報告4

『フロス河畔の水車場』の異なるあり方について

京都女子大学教授 鴨川 啓信

『フロス河畔の水車場』の映画アダプテーション作品を取り上げて、この物語の再読を試みた。長編小説の物語は、時間的制約がある映画で語り直されるとき、必然的に「圧縮」される。そして「圧縮」は、ただエピソードや描写を省略するだけでなく、物語全体の質的な変化を生じさせることがあると指摘するアダプテーション研究を参照し、『フロス河畔の水車場』の場合について考察した。

第三者的視点から場面全体を映し出し出来事を明示する映画の語りは、登場人物の性質や内面についての詳細な記述を積み重ね、その背後で進行している出来事の全体像を読者に推測させる小説の語りに比べ、コンパクトで分かりやすいものになっている。一方、この小説の映画アダプテーションの中には、小説には描かれていないことを独自に追加して物語の性格付けを行うものもある。アダプテーション的圧縮が物語の性質を大きく変えるものであれば、情報を削除するだけでなく、追加によるメディア変換もありえることを論じた。

また発表では、元の小説との関係だけでなく、アダプテーション同士や別の映画作品との間テクスト的関係をもとに、この物語を再読する可能性を探った。

■特別講演

ジョージ・エリオットとトマス・ハーディのイングリッシュネス ——カントリー・ハウスとコテッジのある田舎の風景——

西南学院大学教授 金子 幸男

金子先生はナショナル・アイデンティティが作品内でいかに醸成されているのかを探るにあたって、エリオットの『アダム・ビード』(1859) とハーディの『ダーバヴィル家のテス』(1891) を取り上げ、両者の間にある「イギリスらしさ」(Englishness) の違いを読み解かれた。産業革命の前を描いた『アダム・ビード』は田舎の調和と安定が顕著で、階級間の融和も成し遂げられている一方、『ダーバヴィル家のテス』は社会全体が工業化のあおりを受けて変化し、田舎の調和と安定は保ち難くなっている。また『アダム・ビード』の場合、社会の秩序を乱すヘティをコミュニティから排除したのちに、心身ともに健全なアングロサクソンの血を引くアダムと、彼が住む清潔感のある整然としたコテッジを中心になってかつての調和と安定を取り戻すが、『ダーバヴィル家のテス』ではテス一家のコテッジに清潔感がなく、家系と血縁の問題がつきまとつう偽地主階級の一家はコミュニティの中心になることができない。一家が常に絶滅の危機に瀕しているという設定にはダーウィンの『種の起源』(1860) が大きく影響しており、100年の時代設定を経る中で、寛容な社会が厳しい社会に変化していると結論づけられた。

(文責: 濱 奈々恵)

◆コラム◆

〈英国本部便り〉

英國本部の年会費は、日本支部設立（1997年）当初から£10 となっております。刊行費や郵送費の大幅な値上がりにより会員に紙版の *George Eliot Review* を発送することが財政的に難しくなったことから、2024年度より英國本部の学会誌は、印刷可能な PDF ファイルとしてオンラインで提供されることになりました。紙版の学会誌をご希望の方は、学会誌が刊行された後バックナンバーとして英國 The George Eliot Fellowship のウェブサイト内の Shop から 1 部 £15 で購入することが可能になります。

<https://www.georgeeliot.org/fellowship/shop>

日本支部事務局による注文の取りまとめは行いませんので、希望者は英国本部ウェブサイト内の Shop に直接お申込ください。なお、昨年度の総会で承認されました通り、日本支部では、学会誌刊行費・発送費負担の軽減等を目的に、2024 年度より学会誌『ジョージ・エリオット研究』の紙版の完全廃止を決めておりますことをどうぞご理解ください。 (文責: 永井 容子)

(文責: 永井 容子)

***** 事務局からのお知らせ *****

日本ジョージ・エリオット協会会員の皆様には、常日頃から大変お世話になっておりますこと、深く感謝申し上げます。

本協会では、事務の効率化と経費削減のため、2017年度より会員皆様への各種お知らせにつきましては、協会ホームページ（2022年度からURLが変更されています：<https://www.g-eliot.com/>）や個人メールアドレスへの送信など、インターネットを積極的に活用した形をとらせていただいております。ご所属、ご住所、電話（FAX）番号を初め、メールアドレスに変更が生じましたら、速やかに事務局までご連絡いただきますよう、お願い申し上げます（事務局のメールアドレス：georgeeliot.japan@gmail.com）。

なお、インターネットをご利用なさらない会員の方々には、郵便で各種資料の送付をしておりますが、こちらも変更が生じましたら、事務局までご連絡ください。

事務局：〒769-2193 香川県さぬき市志度 1314-1 徳島文理大学香川校 中島正太研究室内
日本ジョージ・エリオット協会事務局

協会設立 20 周年記念事業に関するご協力のお願い（再掲）

本協会では設立 20 周年記念事業の一環として、テキスト・シリーズ「ジョージ・エリオットを原文で学ぼう」プログラムの発刊計画を進めています。

大阪教育図書のご協力のもと、第一巻、『サイラス・マーナー』教科書が、2017 年 12 月に刊行されました。会員の皆様におかれましては、今後も、大学や大学院その他の場で、是非、『サイラス・マーナー』教科書を採用していただきますよう、ご協力の程、よろしくお願ひいたします。

尚、協会では引き続き、第二巻『フロス河畔の水車場』教科書の発刊計画に向けて準備を進めています。

第 27 回全国大会について

2024 年 12 月 21 日（土）、成蹊大学（東京都武蔵野市吉祥寺北町 3 丁目 3-1）にて、第 27 回全国大会を開催いたします。当日は、研究発表、総会、シンポジウム、特別講演会、懇親会を予定しております。多数の皆様のご参加をお待ちいたしております。

大会の詳細は 10 月に協会のホームページに掲載し、ご登録いただいているメールアドレスへお送りする大会プログラムでもお知らせいたします。経費節約のため、大会プログラムはホームページまたは添付ファイルよりダウンロードしていただきますようお願いいたします。また、大会のご出欠はメールでご案内しますオンライン出欠フォームをご利用いただきますよう、お願ひいたします。

なお、昨年度の総会におきまして、会員の方々（学生会員を除く）にも大会参加費をお一人 500 円いただくことが決定されました。協会の運営費確保のため、ご協力の程、お願ひいたします。

第 27 回全国大会シンポジウム 題目：19 世紀イギリス小説と医学・科学（仮）

- 講師 佐藤エリ（神戸女学院大学非常勤講師）
他者の心を科学できるのか—『ミドルマーチ』における「二組の夫婦の問題」
- 司会・講師 矢野奈々（北里大学専任講師）
医者・科学者であるリドゲイトとジキル博士の心の均衡について
- 講師 谷田恵司（東京家政大学名誉教授）
『荒涼館』の突発的人体発火をめぐるルイスとディケンズのやりとりから考える、
文学と科学の接点

シンポジウム要旨

19 世紀のイギリスは医学と科学が急速に進歩し、それと共に小説における医者・科学者の描写も変化した。フェリシア・ボナパルトはオックスフォード大学出版局版『ミドルマーチ』の序文で「エリオットはリドゲイトのような科学者を登場させるだけではなく、科学的思考を小説に導入した最初の人物」であることを言及している。このようなエリオットの小説家としての科学的アプローチの背景には、彼女のパートナーであったルイスが医学や生理学研究に没頭していたことが大きく影響する。またルイスは当時の著名な文芸家との交友があり、彼らにも科学的な面での影響をもたらしてもいる。

本シンポジウムでは、医学、科学的テーマが含まれたエリオットの作品と、19世紀イギリス小説、さらにはルイスの著書を取り上げ、当時の文学と医学・科学について考察していきたい。

佐藤氏はルイスの著作『生命と精神の諸問題』(全5巻シリーズ)から特に『心理学の研究』における議論を用いて、『ミドルマーチ』の2組の夫婦——ドロシアとカソーボンおよびリドゲイトとロザモンド——の関係性について論じる。個々の主観的な精神は、どこまで他者を理解しえるのか、についてエリオットとルイスの考えを明らかにしていく。矢野はマッドサイエンティストのステレオタイプとも言われる『ジキル博士とハイド氏』のジキル博士と『ミドルマーチ』のリドゲイトのそれぞれの心の均衡に焦点を当て、対極する二つの心の出現と医者・科学者との関係性を考察する。最後に谷田氏はチャールズ・ディケンズの『荒涼館』第32章での突発的人体発火による登場人物の死亡をめぐるルイスの批判とディケンズの反論などを手がかりにして、エリオットの作品も踏まえつつ、文学と科学の接点を考えていく。

(矢野奈々)

第27回全国大会特別講演のご案内

本年度の特別講演には、大石和欣先生(東京大学総合文化研究科教授)を講師としてお招きします。先生のご専門はロマン主義を中心とした、18世紀から19世紀におけるイギリスの文学の社会史的研究で、著書に『家のイングランド—変貌する社会と建築物の詩学』(名古屋大学出版会、2019年)、編著に『コウルリッジのロマン主義—その詩学・哲学・宗教・科学』(東京大学出版会、2020年)、*Coleridge, Romanticism, and the Orient: Cultural Negotiations* (Bloomsbury, 2013)などがあります。ロマン主義研究と並行して、18世紀末から19世紀半ばにかけての「共感」の歴史的・思想史的な布置を明らかにしながら、その位相を女性小説家たちの作品のなかに辿るご研究も行い、シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』やエリザベス・ギャスケルの『北と南』に関する論文を発表されています。今回の特別講演のタイトルは「共感と慈善の限界——ジョージ・エリオット小説における女性の生と社会のしがらみ」です。皆様、奮ってご参加ください。

講演要旨

ジョージ・エリオットの『ミドルマーチ』(1871-72年)において、カソーボンは博愛の精神に基づく社会活動であるフィランソロピーを「広大な領域」と呼ぶが、それは直接的には福音主義者として奴隸貿易廃止運動に尽力したウィリアム・ウィルバーフォースの活動を指してのことであり、後にドロシアが活発に行う篤志がそこに含まれるほど「広大な」ものかどうかについては議論の余地がある。

実際、エリオットの小説では、豊かな共感力を備え、ときに慈善活動や篤志を志す女性が登場するが、彼女たちはさまざましがらみに絡みとられてしまい、必ずしも十分な社会貢献を果たしているわけではない。ドロシアは最終的にウィル・ラディスローとの再婚を選ぶことで、資産を失い、志半ばにして慈善事業を放棄せざるをえないし、『アダム・ビード』(1859年)のダイナ・モリスは最終的にはアダムと結婚することで、メソディスト説教師としての活動から身を引いてしまう。その一方で、『ロモラ』(1863年)の主人公は、夫との結婚生活の失意と破綻がきっかけとなり、サヴォナローラとの邂逅を経てフィレンツェの社会的弱者に対する共感を胸に献身的な慈善活動への道を進むことになるが、サヴォナローラの狭量な狂信性や血縁や地縁が求める責務がそうした共感や慈善の障害にもなり、ときにマイナスに作用しさえすることを明瞭に意識していた。

19世紀のイギリスにおいて慈善活動は、女性たちにいわゆる公共圏に関与する口実や突破口を提供したが、その感情的基盤ともいべき共感は、夫婦や家族に対する愛情や義務感、あるいは資産や地位といった経済的・社会的条件と不可分であったことも事実であり、エリオットはそうした共感や慈善を規定する社会のしがらみとその構造を描いている。本論ではその位相を、感情史の手法を一部用いて、シャーロット・ブロンテやエリザベス・ギャスケルの小説における「共感」のあり方と比較しながら浮かび上がらせてみたい。

第 27 回全国大会研究発表者の募集

発表テーマ： ジョージ・エリオットに関連したもの 発表者数： 1～2 人（予定）
応募資格： 日本ジョージ・エリオット協会会員 応募締切： 7 月 25 日
発表時間： 30 分（発表 25 分、質疑応答 5 分）時間厳守でお願いいたします。
レジュメ： ワープロ A4 版で、約 400 字程度。発表題目には、英文名も添えてください。
※ 原稿には、氏名・住所・所属・電話番号・メールアドレスを明記してください。

宛先： 〒769-2193 香川県さぬき市志度 1314-1 徳島文理大学香川校 中島正太研究室内

日本ジョージ・エリオット協会事務局／E-mail: georgeeliot.japan@gmail.com

応募は郵送、またはメールで、お申し込みください。応募者多数の場合は、調整させていただきます。

※ 本協会は、学生会員の研究活動を支援し、研究発表を奨励しております。学生会員が発表を希望する場合は、発表のレジュメに指導教員の推薦文（書式自由）を添え、7 月 25 日までにメールにて事務局にお送りください。

2025 年度『ジョージ・エリオット研究』第 27 号への投稿論文募集

2025 年 11 月に発行予定の学会誌『ジョージ・エリオット研究』第 27 号の投稿論文の締め切りは 2025 年 4 月 1 日（火）厳守 です。奮ってご応募ください。投稿規定およびチェックシートは、協会のホームページ (<https://www.g-eliot.com/ronshu>) からダウンロードすることができますので、必ずご参照ください。論文の他にも書評を募っておりますので、新刊書などの書評をご希望される方は、編集委員長の新野緑先生、もしくは事務局まで、お早めにお申し出ください。

会費納入のお願い

会費納入につきまして、お願いいたします。年会費および振込先は、以下の通りです。

一般会員 7,000 円（国内会費 5,000 円と英國本部会費 2,000 円）

英國本部に登録された終身会員 5,000 円（国内会費のみ）

学生会員（大学院生、学部生など） 2,000 円（本部会費を含む）

振込先（郵便振替口座）：00960-0-105579 日本ジョージ・エリオット協会

*手数料はご負担いただいております。

なお、事務処理の都合上、9月末までにお振込をいただきますよう、ご協力をお願いいたします。ご承知の通り、本協会は英國ジョージ・エリオット・フェローシップの支部をかねておらず、毎年 1 月に英國本部に会費を送金しております。会費納入が年を越しますと、本部への送金に間に合わず、本部からの郵送物が受け取れなくなります。また、退会につきましてもお申し出がない限りは、遡って未納分の会費を納入していただくこととなつておりますので、くれぐれもご注意ください。

新入会員の確保について

現在、本協会は、一般会員 65 名、終身会員 12 名、学生会員 4 名、合計 81 名となっております。年々数名の会員が加入される一方で、退会される会員もおられ、全体として会員数は漸減傾向にあります。100 名を切る状態が続きますと、日本学術会議から協力学術研究団体としての認定を受けられなくなる可能性がありますので、会員の皆様におかれましては、新入会員確保にご協力を賜りますようお願いします。この問題に関するご意見等がございましたら、事務局までお知らせください。

事務局夏季閉鎖のお知らせ

例年にならい、夏季休暇のため8月1日から8月31日まで、事務局を閉鎖いたします。緊急のご連絡は、事務局中島正太のメールアドレス（nakajima@kgw.bunri-u.ac.jp）宛てにお願いいたします。

☞新刊書等のご案内☞

- ★ ジョージ・エリオット、福永信哲（訳）『ミドルマーチ』（上・下）（彩流社、ジョージ・エリオット全集7、2024年3月）＊福永先生は『ジョージ・エリオットと後期小説を読む—キリスト教と科学の葛藤』（1995）の著者でもあり、キリスト教と科学がせめぎ合うなかで「人は他者との真正の関わり合いと、その導きなしには生きられない」ことを読者の心に響く形で訳しておられます。日本ジョージ・エリオット協会現会長に続く前会長による名訳です。
 - ★ 佐藤エリ「階級を取りはらう女性たち—マルクス主義フェミニズムで読む『ミドルマーチ』ガース一家の物語—」、金子幸男他編著『テクスト批評の実践—英語圏文学・映画・漫画』（音羽書房鶴見書店、2024年4月）。本書は関西批評理論研究会のメンバーが、各自選んだ作品を1つの批評理論に沿って読み説いた論文集です。各論文の冒頭には使用テクスト名、テクスト作者略歴、作品梗概が示され、論文本体の後には用語解説とコラムがつけられ、批評理論の理解に役立ちます。本協会の谷綾子先生も『ドラキュラ』をユング心理学で読み解いておられます。
 - ★ ジョージ・エリオット、富田成子（訳）『ジョージ・エリオット書簡集 [抄訳]』（彩流社、2024年5月）＊エリオット書簡集の初めての日本語訳が刊行されました。

＜お願い＞ ジョージ・エリオットに関する新刊等の情報を事務局までお寄せください。

新規会員のご紹介

日本女子大学人間社会学部文化学科教授 Neil Addison

Neil Addison (PhD, University of Birmingham), is Professor of British Literature and Culture in the Department of Transcultural Studies at Japan Women's University. Having grown up in Thomas Hardy's Dorset (close to Hardy's Sandbourne and Havenpool) he is now vocationally based in Tokyo. His research focuses on nineteenth- and early twentieth-century British literature such as the work of Hardy, Charles Dickens, Oscar Wilde, and Alfred Lord Tennyson. He is a global committee member of the Commission on Science and Literature (CoSciLit) and is currently serving as the CoSciLit Regional Representative for Asia. He is also a reviewer for The Thomas Hardy Journal (U.K), and is a member of the U.K. Thomas Hardy Society, and The Hardy Society of Japan.

廣野由美子先生の翻訳による『ミドルマーチ』に引き続き、今度は福永信哲先生の『ミドルマーチ』が刊行されました。これに加え、富田成子先生の翻訳による『書簡集』も刊行されることとなり、先生方への敬意とエリオットの書き残したもののが新たな形で生き残っていくことへの喜びは増すばかりです。先日、たまたまYouTubeで「若者サポートステーション ジョージ・エリオット編」(福岡県庁作成、15秒の動画)というのを見つけました。「実は私、初めての小説を発表したのは37歳になってからのことでした」という自己紹介をかねたメッセージが流れるもので、こんなところにエリオットが!と驚きました。誰かが前に進むためのサポート役としてエリオットが選ばれ、エリオットが国や時代を超えて今も生きていることを実感しました。お忙しい中、執筆にご協力いただいた皆さま、ありがとうございました。 (編集:濱 奈々恵)

George Eliot Newsletter of Japan 第 28 号

発行者 日本ジョージ・エリオット協会

代 表 廣野 由美子

編 集 濱 奈々恵

事務局 徳島文理大学香川校 中島正太研究室内

〒769-2193 香川県さぬき市志度 1314-1

TEL 087-899-7152 (直通)

E-mail georgeeliot.japan@gmail.com

Homepage <https://www.g-eliot.com/>

振替口座番号 00960-0-105579

発行日 2024 年 6 月 1 日